知　識　学　の　本　質

人間の尊厳*1について

J.G.フィヒテによって語られた哲学講義の締め括りに

（1794 年）

渡邊タツ・佐々木義之　共訳

この紙片は、探求としてではなく探求の後の最高に魅了された感情の流露として、著者が自分の後援者ないし友人たちとともに真理へと向かう共同努力の中で過ごした至福な時間を記念するために、彼らに謹呈するものである。

私たちは人間精神の全てを余すところなく精確に測定しました。――私たちは、学問の機構を人間の根源的な機構の適切な叙述として打ち建てることができるための基礎を据えたのです*2。最後に私たちは、全体に関する簡単な展望を与えます。

哲学が私たちに教えるのは、自我の中にある全てを探索することです。自我によって初めて、死せる無定形的な混沌に秩序と調和がもたらされます。ただ人間からのみ、合法則性が人間の周囲に、人間の観察の限界にまで拡がり、――人間がこの観察の限界を拡げれば拡げるほど、秩序と調和も一層拡げられるのです。人間の観察行為は、無限に多種多様なもの、――その各々にその場所を割り当てるので、それらのどれもが他のものを押し除けることはありません。人間の観察行為によって際限のない多種多様性に統一が与えられます。たとえば、天体が統合されてただ一つの組織体となり、星々*3が視軌道を回ります。自我によって、地衣類*4からセラフィーム（熾天使）*5に至るまでの［存在の］大いなる階梯が聳え立ちます。自我の中に全精神界（全霊界）の機構が存在し、人間は、自分と精神界（霊界）とに与える法則がそれらにとって妥当であること、またこの法則が将来普遍的に承認されることを、当然期待できるのです。今でも未だ無定形的で混沌であるもの一切は、人間によって最高に美しい秩序へと解消され、今既に調和的であるもの一切は――今までは発展していなかった法則に従って――ますます調和的になるでしょう。人間は喧騒の中に秩序を、あまねき破壊の中に計画を持ち込むでしょう。計画によって、腐敗したものは形を与えられ、死は新たな素晴らしき生を召喚するでしょう。

私たちが人間を単に観察する知性（精神）と見做すとき、それは人間ですが、私たちが人間を実践的－能動的な能力と考えるとき初めて彼はそうなるのです！*6

彼は単に必然的な秩序を事物に与えるだけではなく、意図的に選んだものをもそれらに与えます。なぜなら、人間が足を踏み出すところでは、自然が目覚め、彼の眼差しによって、彼から新たなより美しい創作物を得ようと自分を整えるからです。人間の周囲を取り巻く素材から造形され得たものとしての人間の身体が、既に最も精神化（霊化）されたものです。彼の影響圏内では、空気はより快適に、気候はより穏やかになり、そして自然は彼によって生ける者の住居となり、その保護者となることに胸を高鳴らせます。人間は生の素材に対し、彼の理想に従って組織化され、彼が必要とする材料を彼に提供することを要求します。以前は冷たく死んでいたものが、栄養ある穀類、気分爽やかにする果物、元気づける葡萄となって彼のために生い茂ります。そして、彼がこれらに他の要求をするや否や、これらは彼にとって何か別のものとなります。――動物は人間の周囲で自身を高潔にします。彼の賢明な眼差しのもとでその野性をやめ、自分の主人の手からより健康的な食物を受け取り、その代わりに進んで人間に服従するのです。

更に、魂たちは人間の周囲で自身を高潔にします。かの〈人〉であればそれだけより深く広く〈人々〉に作用を及ぼします*7。そして人間性の真のしるしを持つ方は、人類によって決して見誤られることはありません。人間精神並びに心情の全てが、人間性のどの純粋な発露にも現れるのです。より高次の人をめぐって人々は集団を成します。その集団の中では、

より偉大な人間性を有する方自身がその中心点に最も近いところにおられます。人々の精神は一体となり、かつ多くの身体において一体を成す精神（霊）のみを形成しようと努力します。全ての人間は一つの悟性、そして一つの意志であり、人類の大いなる唯一可能な計画の〈協働従事者〉としてそこに立っているのです。より高次の人は、彼の同時代人たちを人間性のより高次の段階へと力強く引き上げます。人類は自分たちが飛び越えた深淵を返り見て驚嘆します。より高次の人は自らが捉えることができるものを巨大な手で人類年鑑*8から引き剥がすのです。——

人が住む粘土製の小屋を取り壊してみなさい！人間はその現存在からして自分の外にあるもの一切から端的に独立しており、まさに自分自身によって存在しています。そして人間は、自分が引き上げられる瞬間にも、即ち、時間と空間ないし自分自身以外のもの一切がその人間から消え去るとき、或いはその人間の精神（霊）が強引にその人間の身体から拉し去られるとき、——そしてその後、その人間が身体を通じて初めて遂行しようとする目的の追求のために再度自分から進んでそれに帰還するとき、既に粘土製の小屋の中で「自分は存在している」という感情を持っています。——今人間を取り巻いているこの二つの隣り合った最後の塵（「感情」と「身体」）を分離してみなさい。彼はそれでも存在するでしょう。そして彼は、存在せんと欲するが故に（「意志」故に）存在するでしょう。彼は、自分自身によって、自分の力から、永遠に存在するのです。

彼の計画を阻止し、頓挫させてみなさい！——諸君はそれを押しとどめることができるでしょう。しかし、幾千年もの間人類年鑑の中に存在するもの（計画）とは何なのでしょうか？——目覚めに際しての軽やかな朝の夢であるところのものです。朝の夢は持続し、その作用を及ぼし続けます。諸君にとって消え去ったように見えるものは、単にその領域が拡大しただけなのです。諸君にとって死のように見えるものは、より高次の生のためにそれが成熟したものなのです。彼の計画（朝の夢）の色彩と外的な形態は人間から消え去るかもしれませんが、彼の計画は依然として同一のままです。そして、彼が存在するその瞬間瞬間において、彼は自分の外にある何か新しいものを自分の圏内に力強く引き入れます。そして、彼は全てのものを自分の圏内で呑み込み尽くすまで、そうし続けるでしょう。全ての素材が彼の発達の特質を帯び、全ての精神（霊）が彼の精神（霊）と一つの精神（霊）になるまで。

それが人間です。それが「私は〈人〉である」と自分自身に言うことができる者たちです*10。彼は自分自身に神聖な畏敬の念を抱き、そして自分自身の荘厳さの前で身震いし、称揚するのではないでしょうか！——それは「私は」と私に言うことができる者たちです*11。——君がどこに住んでいようとも、単に人間面をしているだけの君であっても、——たとえ君が動物と紙一重の状態で、家畜番の杖の下でサトウキビを植え込もうとも、或いは、君がフエゴ島*12の海岸で、自分で燃え立たせたのではない炎で自分を暖め、その炎が消えるに至っては、その炎が燃え続けないことに泣こうとも——或いは、君が私に最も堕落した最も惨めな悪人に見えようとも——それでもなお君は、「私は」と私に言うことができるが故に、私であるところのものなのです。君はそれでもなお私の仲間であり、私の兄弟です。ああ、

私はかつて確かに、君が今立っている人類の段階に立っていました。というのも、それは人類の一つの段階であり、この梯子に跳躍はないからです。——ひょっとすると、明瞭に自覚する能力がなく、あまりに迅速に進んで行ったがために、自分の状態を自覚する時間が無かったかもしれませんが、私はかつて確かにそこに立っていました。——そして、君はいつか確かに——それには百万年、そして百万年の百万倍の年月が過ぎるかもしれませんが——時間とは何でしょうか？——君はいつか確かに、私が今立っている段階に立つことになるでしょう。そして、そこでは、私は君に、そして君は私に作用を及ぼすことができるでしょう。君もまたいつか私の圏内に引き上げられ、そして、私を君の圏内に引き上げることでしょう。私はいつか君もまた私の大いなる計画の協働従事者として認識するでしょう。——それは、「私は」であるところの私にとって、「私は」であるところの者たちなのです*[13]。私は人間像の荘厳さの前で、そして、恐らく秘奥の闇の中にあって——それでもなお、確かにそのしるしを持つ神殿の中に住まう神性の前で、慄かないなどということがあるでしょうか？この思想の下では、天も地も、時間も空間も、感性の制限一切も、私から消え去ります。ですから、個人が私から消え去らないなどということがあるでしょうか？——私はあなた方*[14]を個人へと連れ戻すのではありません。

「全ての個人は、純粋精神（霊）が一体を成す大いなる統一の中に包み込まれている[1)]」。これが、私があなた方の思い出に別れを告げる最後の言葉であり、そして、あなた方に別れを告げる思い出です。

【原注】

1）私の機構を知らなくとも、少なくともこの考察の過程を全体的に見渡そうとしさえすれば、この思想をスピノザ主義的な思想ととることは不可能である。私にとって純粋精神の統一は到達できない理想である。究極的な目的ではあるのだが、決して現実とはならないのである。

【訳注】（渡邊による）

＊1）フィヒテは 1794 年の 2 月半ばから 4 月半ばまで、チューリッヒのラーヴァーター家にて 6 人の聴衆を相手に「批判哲学の概念と機構」というテーマで講義をした。『人間の尊厳について』は、この講義を終えるにあたってフィヒテが行った、いわば「お別れ講義」である。フィヒテは 1794 年 6 月 14 日のラーヴァーター牧師宛の手紙の中で、イェーナ大学で行った『全知識学の基礎』の講義について、それがラーヴァーター家で行った「批判哲学の概念と機構」講義を徹底的に再検討し、諸処をより厳密に表現しなおしたものだと述べている。1793 年末から 94 年始にかけて自分の哲学の基本的な考えを決定的に明確にしたフィヒテは、ここで初めて自分の「知識学」（Wissenschaftslehre）の原理を提示したのである。本紙片は基本的に 1794 年に刊行された『知識学の概念』並びに『全知識学の基礎』に対応しているとみてよい。『人間の尊厳について』という題は、「知識学の本質」を「人間の尊厳」としてまとめているのであり、フィヒテの「自我（私）」の志向するところを示している。以上の理由で「人間の尊厳」に「知識学の本質」とルビを振っている。

＊2）フィヒテにおいて人間精神は、自身の哲学並びにあらゆる諸学の開始を告げ、それらを完成させる原理的な機構（シ

ステム）として基礎づけられている。この人間精神は、それ自身が自分の経験的意識の「事実」（人間の意識内容を構成している知・カテゴリー・判断・自覚等）を自分自身で拡張・形成していく能産的な活動を基本的な活動様式とする機構として設定されている。

＊3)「星々」としたところの原語は Sonne の複数形 Sonnen である。「太陽」を意味するときは単数形でのみ用いられ、複数形では用いられない。そのため複数ある「恒星」と解釈して「星々」とした。

＊4)「地衣類」（Flechte）は、菌類の内で藻類を共生させることで自活できるようになったもの。

＊5)「熾天使」（Seraph）は、偽ディオニシウス・アレオパギタが定めた天使の九階級のうち最上級の天使階級とされている。神への愛と情熱で体が燃えているため、燃える天使（熾天使）と呼ばれる。原文では単数形であるが、複数形のほうがよく知られている語であると思われるのでセラフィームとした。

＊6）この段落までは観察する知性（精神）としての人間の経験的意識の「事実」について語られてきた。この経験的意識の「事実」は「行為の結果としての事実」（Tat）であって、それを事実ならしめる原因としての人間精神の能産的な働きがあって初めて「事実」となりうるのであり、それなしでは「事実」とはなりえないのである。フィヒテは、成立している事実とその根拠との循環的な同一性、即ちこれまで述べてきたことを単なる「知」として語るのではなく、それ自身に基礎を持つ人間精神の働きを介して、知と行為との同一性を確保しており、そうであって初めてこの経験的意識の「事実」は「事実」として成立しうるということを述べている。なお、この文章にはフィヒテの造語にしてテクニカルタームである「事行」（Tathandlung）の概念は登場しないが、恐らくこの概念と同じことを意識して語っているように思われる。「…我々が持たなければならないのは実質的な根本命題であって、単に形式的な根本命題ではない。しかし、このような根本命題はまさに「事実（Tat*sache*）」を表現するのであってはならず、「事行（Tat*handlung*）」をも表現できなければならない」（フィヒテ『『エーネジデムス』の論評』SW 版 I 巻 p.8)。「自我は［能産的な］行為であると同時に、［その能産的な］行為の所産である。能動的なものと能動性によって生み出されるもの、つまり、［その能産的な］「行為」（Handlung）と［その行為の結果としての］「事」（Tat）とが唯一同一である。従って「私は」（Ich bin）は「事行」（Tathandlung）の表現である。」（フィヒテ『全知識学の基礎』SW 版 I 巻 p.96)。

＊7）原文は je mehr einer Mensch ist, desto tiefer und ausgebreiteter wirkt er auf Menschen。Mensch は無冠詞である。無冠詞で用いられるこの Mensch は合言葉的（掲称的）表現として用いられている。この無冠詞の Mensch、そしてそのあとに続く人称代名詞 er が一体何を指しているのかは、はっきりとはわからない。しかしこの講義がラーヴァーター牧師とその家族、およびフィヒテの知人友人と後援者というキリスト教にかかわるグループ内で行われており、かつその内部で通用する合言葉であろうことから、無冠詞の Mensch はキリストを表す合言葉ではないだろうかと思われる。

＊8)「人類年鑑」の原語は dem Jahrbuch des Menschengeschlechts。率直に言えば、これも本紙片のみでは何を意味しているのかを推し量るのは難しい。しかし、フィヒテは『全知識学の基礎』において、「知識学は人間精神の「実際的歴史」であるべきものである」と述べている（フィヒテ『全知識学の基礎』SW 版 I 巻 p.222)。フィヒテは同書で「表象

の演繹」の項において実際にこの「人間精神の実際的歴史」を記述した。そこでは「自我は直観において自らを能動的なものとして産出する」(同書 p.229)、「生産能力は常に構想力である。従ってこの直観されたものの産出作用は構想力によって生じ、かつそれ自身一つの直観作用（無限定な或るもの［訳者註：人間精神］の活動的意味における諦観）である」(同書 p.230）とある。「自らが捉えることができるものを巨大な手で人類年鑑から引き剝がす」という表現は、この「人間精神の活動的意味における諦観」と呼ばれるところの直観作用のことを表しているのではないだろうか。また、人間精神の働きは、最終段落からも明らかなように全ての個人に及び、かつ全ての個人によって担われるものである。「人類年鑑」という言葉からイメージできるのは、人間精神がこれまで各個人の身体を通して遂行してきたことを記録している歴史書のようなもの、いわば「人類の歴史の記録の宝庫」とでも呼びうるものでもあることを表しているのではあるまいか。

＊9）この段落では、人間は「身体」とその中で持つ「(存在）感情」とは関係なく、「精神（＝意志)」として存在している、ということを述べていると思われる。「最後の二つの塵」とは、この文の流れを受けて「感情」と「身体」をそれに例えたものと思われる。

＊10）Ich bin Mensch を「私は〈人〉である」と訳した。ここでも Mensch は訳注＊7 同様に無冠詞であり、合言葉的表現として用いられている。この Ich bin Mensch は、前段落で説明された或る人間が、Ich bin=Tathandlung の遂行者として経験的意識の事実をどこまでも拡張していく自分を省みて自分に立言することのできる者の反省的表現の言葉である。判断主体（並びに判断主語）である「私」が、経験的意識の事実をどこまでも拡張していく自分自身の中に〈人〉を見出して、かつ自分自身に向かって述定（述語付け）して「私は〈人〉である」と立言するわけである。この場合、判断主語の「私」と判断述語の〈人〉を結ぶ繋辞 bin は、「私」から〈人〉へと自己深化発展的に移行したその過程そのものを表している。この無冠詞 Mensch は、経験的意識の事実をどこまでも拡張していくことができたとしたら、そこで出会うことになるのは統体としての人そのもの、つまりキリストそのものであるということを暗に言っているのかもしれない。そうだとすれば「私（Ich)」＝「存在する（bin)」=「〈人〉(Mensch)」は同じキリストの三重表現である。しかもこの Ich bin Mensch は事実上自我の自己拡張であるから、Ich bin Ich「私は〈私〉である」という自己深化発展的・反省的表現と同一である。

＊11）Ich bin を「私は」と訳した。これは、あとに残る余韻を生かした佐々木氏のアイデアである。このアイデアに後付ける形になるが、渡邊は、この表現によって、事行の完遂結果として自分自身に言うことができる「私は〈人〉である」に対して、未だ完遂されない事行に従事する者たちの現在進行形でその瞬間毎での事行に従事している最中のイメージが、このあとに残る余韻によって生かせられるのではないか、と考えた。主語の私からの自己深化発展的移行を表す繋辞を介してその先にまだ述定（述語付け）されていないというイメージは、まさに「私は」と主語を発した時点でその私が「存在する」ことと同義であることを示す Ich bin（Ich=bin「私＝存在する」）というイメージを表しえていると思われるし、その表現が Tathandlung（事行）に今まさに従事しているというフィヒテの言いたいことにぴったりしているのではないかと思われる。なお、「私は〈人〉である」という立言が「自分自身に言うことができる」と言われているのに対して、「私は」という立言は「私に（mir)」つまり「フィヒテに」言うことができると言われていることは対比的で印象的である。秘儀参入者でもあるフィヒテは Ich bin ないし Tathandlung がキリストの名にふさわしいと考え

ていたのではなかろうか。そして彼は、彼に Ich bin と言うことができる者は誰でも、この Ich bin というキリストの名において自分たちが互いに同じ究極の目的である Tathandlung の完遂に向けて協働従事する者として結ばれているということを、表そうとしたのではなかろうか。

＊12)「フエゴ島」は南アメリカ大陸の南端部に位置するティエラ・デル・フエゴ（フエゴ諸島、Tierra del Fuego）の主島。

＊13）原文は Das ist mir, der ich Ich bin, jeder, der Ich ist. 原文を見る方の中にはこの表現に面食らう方もおられるかもしれない。中山豊『中級ドイツ文法』及び牧野紀之『関口ドイツ文法』によると、1・2 人称の人称代名詞が関係代名詞の先行詞となる場合、関係代名詞の直後に対応する人称代名詞を同格的に置き、関係詞節の定形の人称はその関係代名詞の直後の同格的な人称代名詞と一致させるという規則があるという。この関係代名詞直後の人称代名詞は敬称の 2 人称以外ならば省略することもできるが、その場合は関係詞節の定形は 3 人称に一致する。

Das ist mir, der ich Ich bin, jeder, der Ich ist. ＝ Das ist mir, der Ich ist, jeder, der Ich ist.

mir を先行詞とする関係詞節の Ich も、jeder を先行詞とする関係詞節の Ich も無冠詞であり、これまでのこの言葉の使われ方を鑑みるに、これもまたキリストを表す合言葉であろう。直訳すれば「それは、〈私〉であるところの私にとって、〈私〉であるところの者たちです」となるが、そうはしなかった。その理由は、次の通りである。①これまでの文章から読み取れることや訳注で示したことを踏まえて、「〈私〉であるところの私（フィヒテ)」も「〈私〉であるところの者たち」も「事行の完遂に向けて現在進行形で事行に協働従事している者たち」であることが明白であること。②加えて、フィヒテが述語で無冠詞の Ich を用いる際、それはやはり合言葉的表現として用いられ、Tathandlung を表現しているのと同じであるということ。つまり実は述語で無冠詞の Ich が用いられる場合は同じ「事行」の表現である Ich bin と言っているときと意味が同じである。従って、佐々木氏のアイデアである「私は」をここで用いることがよいように思われた。

＊14）本紙片ではこれまで「君」と訳した du や「諸君」と訳した euch がこれまで使われてきたが、ここは Sie となっている。ばらばらで一読しただけでは面食らうかもしれないが、これは「講義」の中で呼びかけている相手が、冒頭に記されている「友人」か「後援者」かの違いではないかと思われる。

【参考文献】

中山豊・著『中級ドイツ文法』

牧野敬之・著『関口ドイツ文法』未知谷　2013 年

ラインハルト・ラウト／加藤尚武／隈元忠敬／坂部恵／藤澤賢一郎・編『フィヒテ全集 3 初期哲学論集』晢書房 2010 年

ラインハルト・ラウト／加藤尚武／隈元忠敬／坂部恵／藤澤賢一郎・編『フィヒテ全集 4 初期知識学』晢書房 1997 年